



合言葉は「五島のために」、 安心して暮らし続けられる島へ。

ひとりひとりの情熱が不可能を可能に変えていく。

五島市地域づくり事業協同組合 事務局長 宮本恭子



2040年の日本を 体感できる島

日本全体の「20年以上先に行く少子高齢化率」であり、移住者が急増し、全国でも異例の「65年ぶりの人口の社会増」をかなえた島として、また「2040年の日本を体感できる島」としてワーケーションツアーも開催される長崎県五島市。

朝ドラや漫画のドラマ化で、旅行先としても希望していただく機会が増え、年間約20万人の観光客が来られます。福岡や長崎から飛行機や船でアクセスが可能な五島市福江島は、長崎市から西へ約100キロ、約1,200年前、のちの真言宗の開祖・空海が日本最後の地とし、遣唐使として中国に渡ったとされる西の果てにあります。

古くから人々が暮らしていた五島市ですが、約50年前には約9万人あった人口も、現在はおよそ1/3の約3万4,000人まで減少し、その高齢化率は40%を超えています。

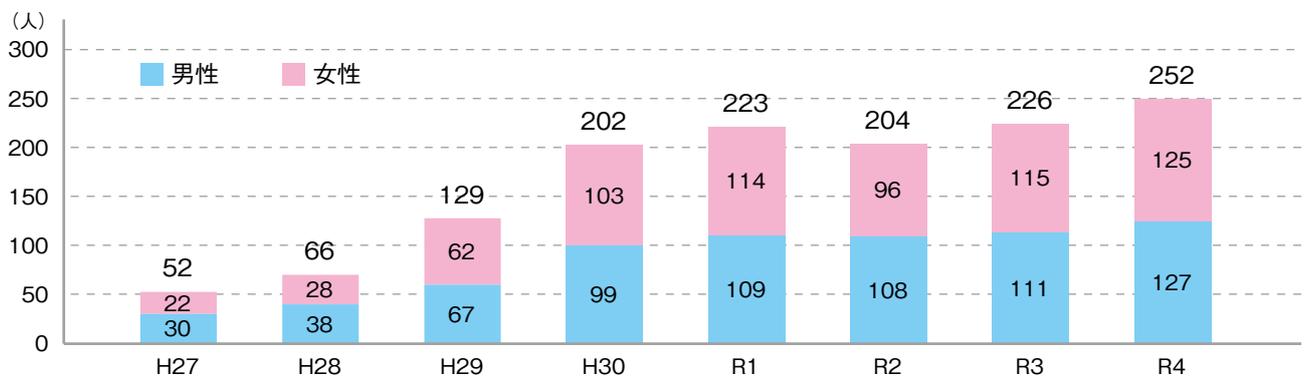


人口減少にともなう様々な社会課題がすでに表層化し「未来の日本の社会課題」をまさに今、取り組んでいる島でもあります。

課題を解決すべく開始された様々な取り組みは成果がはじめており、移住者は直近5年間連続で毎年200人を超え、合計1,000人以上が移住しています。移住者は20歳未満から60代以上まで幅広く、なかでも全体の約75%が30代までの若者。最近では、家族連れや出産予定の夫婦が移住されるケースが増えています。

私自身も約8年前に地域おこし協力隊として東京から五島市へ移住しました。当時はインターネットで検索してもきれいな海の写真が数枚出る程度、宅急便は届くのだろうか、住まいはあるのだろうか、給料は東京時代の半分以下だが生活できるのだろうか、様々な不安がありました。友人の「行ってダメなら、帰ってくればいいよ」の言葉を支えに一度も訪問したことがない五島市に移住を決めたのです。

■市が関わった移住者数（年度）



五島市の移住の推移(五島市提供)

18歳の別れ

五島市で一番大きな福江島の面積は約326平方キロメートル。横浜市とほぼ同じ面積で、車で島を一周すると約3時間かかります。私が移住して一番の感想は、「こんなところが日本に！」。

美しい海と緑豊かな島で、米に麦、魚、野菜、卵、牛に豚に様々なものが生産・飼育され、古きよき日本の文化が色濃く残る場所で、自然に寄り添った暮らしをしている人が多いです。

2022年には、日本ジオパークに認定されました。その大地は、約2,200〜1,700万年前に大陸の砂と泥が川や湖で堆積した五島層群と呼ばれる地層が基となっており、その後、火山の噴火によって火山台地が形成されました。地質、地形、立地などから、多様な生態系、多種の魚に恵まれていることを活かし、農業、漁業も盛んです。

福江島の北部では粘土質の土壌

で、芋や麦がよく育ち、島のシンボルでもある鬼岳周辺では水はけもよく、野菜がよく育つ火山台地など、その土壌を活かした栽培がされています。

農業でも、漁業でも担い手の高齢化、人手不足は深刻です。例えば、芋の苗を植える6月など繁忙期には人が欲しいが、真夏の閑散期には多くの人を雇用し続けるのは難しいという現状もあります。五島市には4つの高校がありますが、大学や専門学校はなく、高校卒業と同時に進学のため多くの若者が島外に出ていきます。島では「18歳の別れ」と言われ、高校卒業とともに自宅を離れることを想定して暮らす学生さんは、都会よりも自立心が高いように感じています。

高校卒業後、島での就職を希望する若者もおられますが、希望あふれる社会人1年目の気持ちと実際の仕事のギャップで、せっかく就職しても早々に退職、職を求めて長崎市内や福岡へ出ていく若者も多くいることが長年の課題でした。



情熱が不可能を可能に しつこく

過疎化対策でよい結果がでてきている一方、毎年移住される

200人以上の人々に住み続けていただくために、また、高校卒業後、島で社会人生活を継続していただくためには、「仕事」が必要です。これからを担っていく若者が安心して

働ける環境があればと誰もが思う中、令和2年6月に施行された「地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律」は、地域内事業者の仕事を複

数組み合わせることで、通年の仕事を創り出し、安定的な雇用環境を創出することで、人口流出を抑え、U・I・Jターンの促進により人口減少対策の要として期待が持てるものでした。

一方、へ人材を求める企業・団体と働きたい人をつなぐ新しい取り組みは魅力的だが、様々なハードルがあり、「誰もがうまくいかない」と思っていたなかで、福江商工会議所の清瀧会頭、山下副会頭が中心となつて出資企業（組合員）を募り、組合設立の道筋をつけられ、令和3年「五島市地域づくり事業協同組合」は設立されました。「五島のために」と奔走され、熱い情熱と島内企業の島への想いが不可能を可能としました。

五島市地域づくり事業 協同組合の魅力

組合職員はすべて月給制の正職員です。安定した収入を得られ、健康保険、厚生年金保険、雇用保険



有機安納芋の植え付け



水産加工食品（練物）製造風景



長崎新聞掲載_2023.7.31(職員研修)

など社会保険も完備し、夏季休暇、年末年始休暇、労働基準法に準拠した有給休暇等の休日も比較的多く、プライベートも充実させることができます。

また働き方は、マルチワーク型とインターンシップ型の2種類から選ぶことができます。マルチワーク型は、季節ごとに繁忙期が異なる農業、食品加工業など様々な仕事を組み合わせる通年勤務する働き方であり、インターンシップ型は、正職員として採用した上で、1、2か月

程度の期間で様々な組合員企業で仕事を経験し、最終的に組合員企業への就職を目指す働き方になります。

このインターンシップ型は、企業としては「通年で人が不足しているが、採用したくてもなかなか応募がなく採用できない」、移住者、高校生卒者としては、「五島で働きたいがどんな企業があるのかわからない」「自分にどんな企業、仕事があるのかわからない」という声を反映し、双方をマッチングさせるた

めに導入しました。

設立3年目の現状と課題

設立当初、派遣先は17の企業・団体からスタートしましたが、組合職員の評判やこの制度に対する評価があいまって、この3年で10の企業・

団体が増え、令和5年8月現在、農業から観光、再エネ関連企業まで五島市内の27の企業・団体が加盟されており、11名の組合職員が勤務をしています。概ねどの派遣先(企業・

醸成も課題となっています。また、派遣される組合職員にとっては、3〜4か月の短期間で派遣先が変わることもあり、職場に慣れたころには次の派遣先での勤務が始まることなど、毎回、新しい職場でのコミュニケーションにも苦労するということをよく耳にします。

設立からの2年は、組合運営を軌道にのせることに注力していましたが、現在は組合運営も軌道にのり、今年2月には全職員を集めた意見交換会、夏には組合職員のリーダーシップ研修も実施しました。

今後、私たち組合事務局が、組合職員と組合員企業とのコミュニケーションを深め、双方をしっかり橋渡しすることが務めであると考えています。

診も個別にいただいています。

一方、派遣制度になじみがない企業も多く、アルバイトとの違いが伝わっていないなど派遣先に対しての理解

そして、組合が雇用における地域の課題解決に貢献し、それが地域活性化につながり、なくてはならない存在となれるよう日々の組合運営に取り組んでいきたいと思